

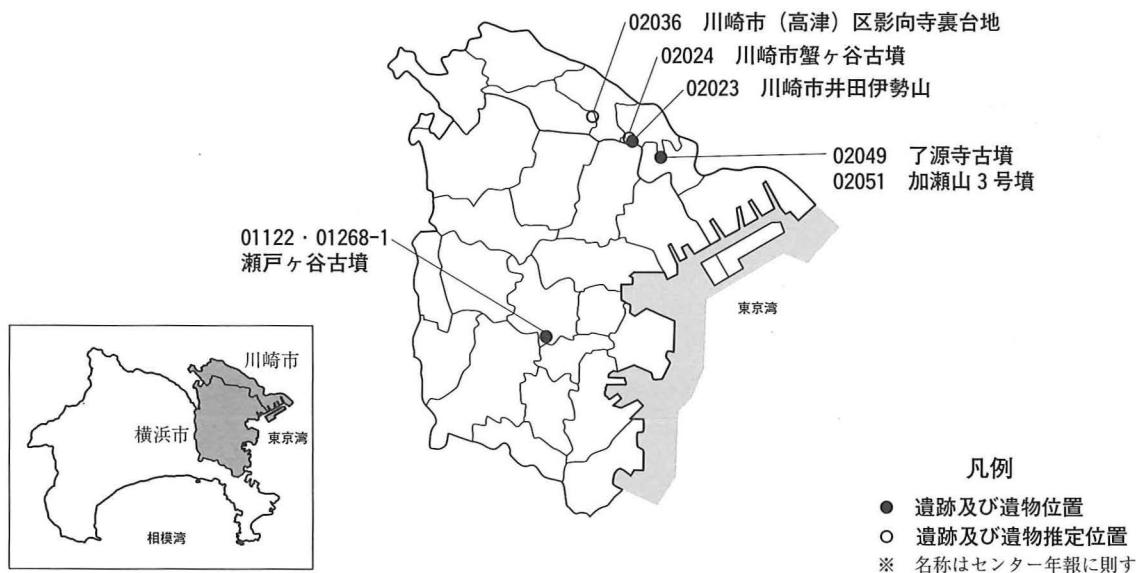
考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（5）

－通称「赤星ノート」の古墳時代資料の紹介－

古墳時代研究プロジェクトチーム

例　　言

- ・通称「赤星ノート」の神奈川県埋蔵文化財センター保管分の古墳時代に関する項目を抜粋し、報告・掲載していくものである。
- ・研究紀要第13号には横浜市域にあたる01122／01268-1番、川崎市域にあたる02023・02024・02036・02049・02051番を掲載している。
- ・番号は埋蔵文化財センターワークスレポート14～18に記載されている番号に対応している。
- ・執筆分担は01122／01268-1番：植山英史、02023・02024・02036番：柏木善治、02051番：小西絵美、02049番：林雅恵が行った。
- ・各記述は「1. 赤星ノートの内容」「2. 記載資料の整理」の2つに大きく分け、1. の細目は[調査(踏査)年月][資料保管場所][記載内容概略]とし、2. は[(遺跡及び)遺物(遺構)概要][掲載図書][掲載図書概略][小結]などとし、資料に応じ該当部分を記載した。
- ・挿図や図版は基本的に作図者のタッチを重視し、赤星氏の図、もしくは実測者の図をそのまま掲載し、写真に関しても同様である。
- ・「赤星ノート」は遺構図では略測図に寸法の数字が記載されるものが多く、遺物図は基本的に原寸に近い図ではあるが、なかにはそれから外れるものも存在するため、縮尺は任意掲載のものが多い。



第1図 対象遺跡及び遺物位置図

年報番号 01122／01268-1 濑戸ヶ谷古墳（2） 横浜市保土ヶ谷区瀬戸ヶ谷

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月] 1943・1950年

[資料保管場所] 東京国立博物館

[記載内容概略]

[瀬戸ヶ谷古墳と赤星ノート2]

赤星ノートの瀬戸ヶ谷古墳に関する資料は、前回紹介した01087の他に、01122、01268-1, -2, -3が存在する。メインとなる資料は神奈川県立埋蔵文化財センターが、ノート整理の際に三区分した01268であり、古墳の測量概略図、遺物出土状況図これに類するメモ、現場写真、遺物写真、原稿（草稿）及び届け出等の公文書など、極めて貴重な資料を多数含んでいる。今回は前回と同じく写真資料主体の01122を紹介するとともに、01268の資料の概略について触ることにする。

A 資料01122 ①写真台紙計2枚（B5）・貼り込み写真計3枚

台紙は、前回の資料にもみられた「神奈川県内出土遺物所有者調査表 県史考古資料A」の裏面を利用している。写真はいずれも瀬戸ヶ谷古墳の発掘風景である。台紙1には、伐採作業をしていると思われる2名の写真と、発掘を行っている3名の写真が貼られている。台紙2には発掘状況の写真で、掘削を行う者とそれを見守る者計12名が納められている。台紙下方にはいずれもボールペンで「横浜・保土ヶ谷・瀬戸ヶ谷古墳（戦前？）」と書かれている。

本資料にはどのような状況での写真であるか示すものではなく、これ以上の言及は困難であるが、本墳に関わる今後の赤星ノートの整理を通じて再検討することとしたい。なお、台紙はA4相当の封筒に保管されている。この封筒の差出人は「United States Government Printing Office」（合衆国政府印刷局）で、宛名は「KANAGAWA PREFECTURAL MUSEUM」（神奈川県立博物館）である。封書の本来の中身については知る由もないが、前回の資料同様、赤星氏が県史作成のための整理を行った際に、再利用されたものであろうか。

B 資料01268-1

(1) 封筒（差出人 國學院大學同友会）

①昭和18年測量図（大要図）1枚（B2相当方眼紙）

(2) 封筒（差出人沙羅書房）

①古墳位置概略図（和紙）

②出土埴輪実測図6枚（A4方眼紙）

(3) 方眼ノート1冊（全科K）－昭和18年発掘時遺物出土状況、出土位置スケッチ等

(4) 封筒（差出人 向坂鋼二氏）

①古墳概要メモ（草稿？）1枚（B5白紙）

②埴輪配列概略図1枚（B4白紙）。

③「古墳のその後を示すもの」メモ9枚（B5裏面再利用）

(5) 封筒（差出人 長谷寺（鎌倉文化研究会））

- ①輕部三郎氏他からの葉書 8枚
- ②輕部氏からの封書 1枚
- ③神林淳雄氏からの封書－中身は赤星氏メモ 2枚（B 5裏面再利用）
- ④メモ帳 1－保土ヶ谷古墳調査日誌 赤星委員（メモ帳サイズに切った15枚（表紙含む）の裏面利用紙ホチキス留め）
- ⑤メモ帳 2－保土ヶ谷古墳出土埴輪説明原稿（①と同様の24枚綴じの最後に綴じられてない5枚が挟まる、裏面使用・一部両面使用）
- ⑥メモ帳 3－保土ヶ谷古墳調査概要原稿（①と同様の21枚綴じ、ほとんど両面使用）
- ⑦35mmモノクロネガフィルム六切り×7、計24枚相当、古墳位置現況及び復元遺物。

（6）封筒（差出人 國學院大學）

- ①「昭和18年調査 保土ヶ谷古墳」（B 5相当紐綴じ、神奈川県への「古墳外形調査願、県からの回答（原本）、遺物出土状況メモ、発掘写真・遺物復元写真貼込みなど計30枚綴じ、表紙に広告紙再利用のメモ貼られる）
- ②「保土ヶ谷古墳調査報告（未定稿）」（B 5相当紐綴じ、表紙1枚、原稿用紙26枚、古墳概略図1枚）
- ③「瀬戸ヶ谷古墳について」昭和42年12月8日 於明倫学園」（B 4を折ってB 5相当12枚紐綴じ）
- ④12月8日「瀬戸ヶ谷古墳について」（B 4を折って）B 5にしたメモ4枚）
- ⑤出土埴輪メモ（B 5社会科試験裏面使用 2枚）
- ⑥埴輪メモ（横須賀市博物館寄贈感謝状・原紙裏面使用1枚）
- ⑦写真貼込み台紙（B 5相当厚紙7枚、一番上に実測図・写真のメモ1枚）
- ⑧埴輪類例参考（横綴じ19枚、3枚白紙）。

以上、01268-1だけでも相当な量があり、また内容も極めて重要なものが多い。個々の内容については次回以降に取り上げていくとするが、封筒等に記されたメモだけでも、多くの情報量を含んでいる。まず、3としたノートであるが、表紙には昭和18年と書かれているが、学習などの文字が横線によって消されている。また、4の封筒には「24年の野帳あるはず」の書き込みが見受けられる。また6の封筒には「貴重資料・未発表」と書かれ、実測図の貸し出し歴などがメモしてある。これらの書き込みから、封筒等に記載されている内容には、少なくとも初回の使用時にメモ書きされたものと、後の整理時に改めて書かれたものの2種類が存在すると推定される。上記のように後のメモには、昭和18年時と昭和24年の調査を区別するために書かれたと考えられるものがあり、資料整理の状況や使用している封書などから、それらの少なくとも一部は神奈川県史編纂時に整理されたものと推定される。これらの書き込みや細かいメモに至るまで保管・整理された状況や裏紙の使用からは、困難な時代の中にあって赤星氏が遺跡の解明に傾けた情熱の一端を示すものであり、その内容とともに極めて重要なものである。

（植山）

- [掲載図書] 三木文雄 1955「神奈川県瀬戸ヶ谷古墳（1）」『日本考古学年報』3
石野瑛 1955「神奈川県瀬戸ヶ谷古墳（2）」『日本考古学年報』3
1979『神奈川県史』20 考古資料 図版705
1986『古代の横浜』「16.鶴見川流域の埴輪」
1986『東京都国立博物館図録 考古遺物編』（関東III）



稲庭、保土ヶ谷、櫛ヶ谷古墳(野原)

写真1 台紙1



稲庭、保土ヶ谷、櫛ヶ谷古墳(野原)

写真2 台紙2

考古学の先駆者 赤星直忠博士の軌跡（5）

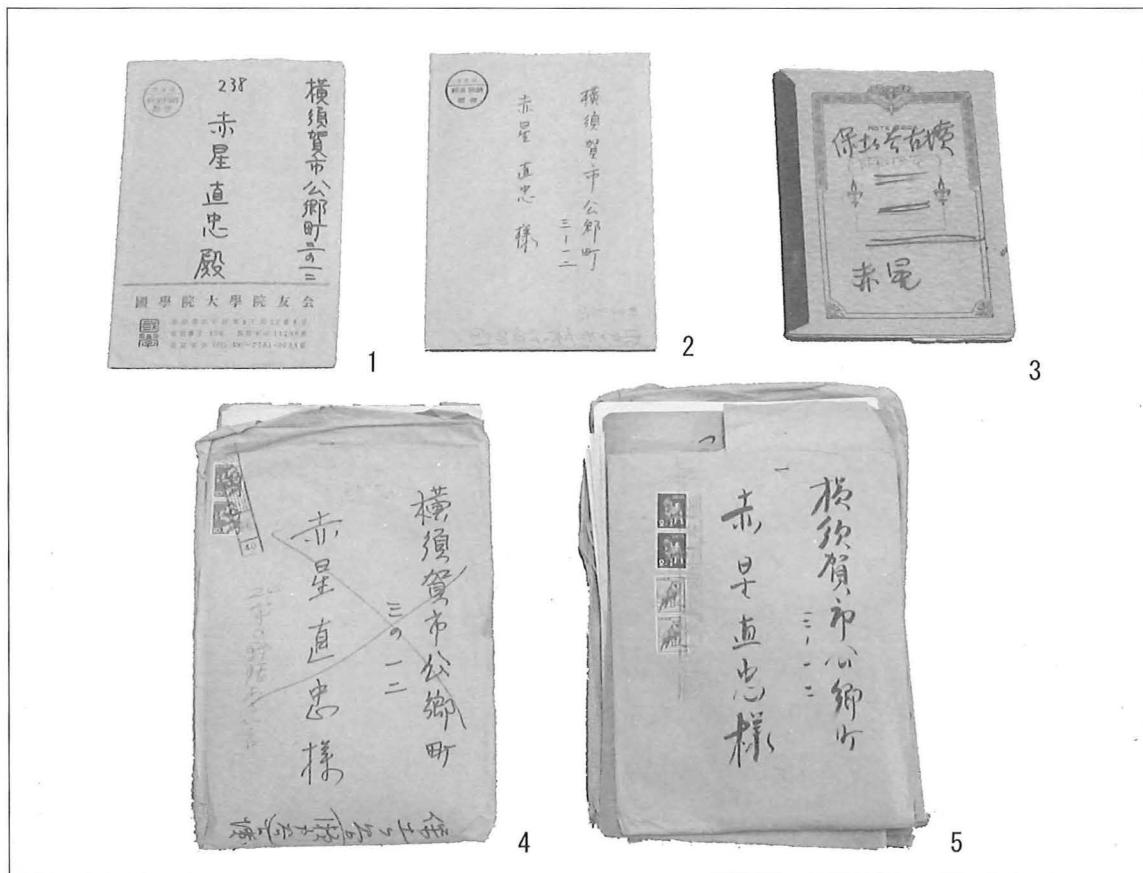


写真3 01268-1 1~5



写真4 01268-1 6

年報番号 02023 川崎市井田伊勢山 川崎市中原区井田伊勢台付近

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

小島金之助氏蔵とされる。

[記載内容概略]

図が入っていた封筒は、大阪大学産業科学研究所のもので神奈川県立博物館資料係御中と記されるが、料金別納郵便のため年月等の情報はない。井田伊勢山は、中原区井田伊勢台の台地が該当すると思われる。かつて現長寿荘付近に大神宮が存在したとされており、それにより御伊勢山との小名がついたとの研究がある。

土器の描かれた図には、「土師器 無文小形土器」と記され、「口いびつ」との注意書きがされる。他、「川崎市井田伊勢山出土」「小島金之助蔵」とメモ書きされる。

器形は、小型の鉢で、図から受ける器面の印象は、指頭、もしくはヘラ状の工具により整形した事が伺えるが、痕跡程度であったのか口縁部外面付近に断片的にその痕跡が描かれるのみである。口唇部下はやや肥厚し、端部は内面が直立気味に延びて尖る。体部は内湾し、底部との境は比較的明瞭である。図はほぼ原寸と思われるが、方眼紙には描かれておらず、細部の計測値なども記されない。現状の図における計測値は口径6.7cm、器高6.5cm、底径4.7cm、体部最大径8.2cmを測る。

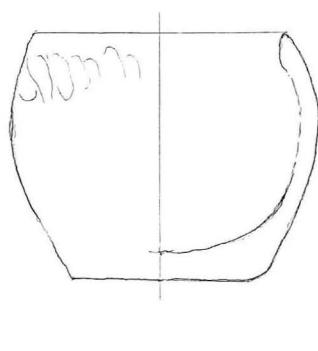
2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

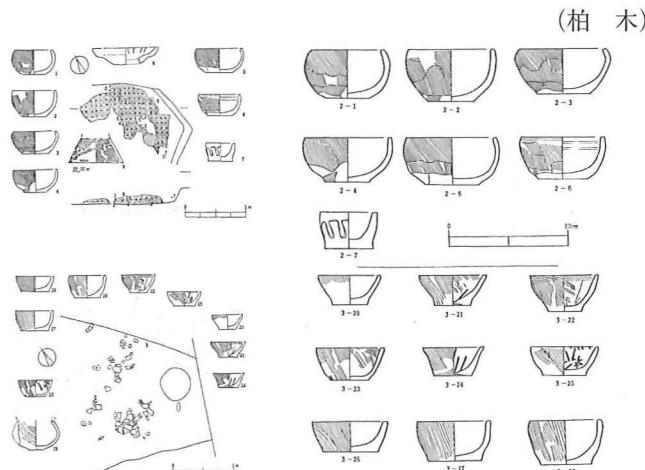
鉢は、体部が内湾し口縁部が内傾して整えられるなど、器形からみたところの特徴からは古墳時代前半であることが考えられる。しかし、調整にかかる注意書きは無く、前期か中期かの判断はつきがたい。印象としては前期の範疇におさまるであろうか。

周囲に展開する井田伊勢台遺跡における弥生時代後期以降の様相や、井田中原遺跡の弥生時代終末～古墳時代初頭の様相を受けても、それら時期に近いものであると考えられる。器形的に似通う事が危惧される、古墳時代中期の手捏等による小形土器とは、このような周囲の状況を受けても相違することが考えられる。

近在の類例としては、井田の西方に所在する野川南耕地遺跡などが挙げられる。2・3号住居より纏まりを持って出土しており、ハケ調整によるものが主体ながら、一部では手捏によるものも報告されている。



第2図 土師器小型鉢（凡そ1/2）



第3図 野川南耕地遺跡2・3号住居出土遺物

年報番号 02024 川崎市蟹ヶ谷古墳 川崎市高津区蟹ヶ谷（中原区平台付近か？）

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

古墳位置を示す模式図のみ。

[記載内容概略]

図が入っていた封筒は、月刊誌配刊の封筒で、神奈川県立博物館館長宛と記されているが、料金別納郵便のため年月等の情報はない。位置の指標として、井田病院・八幡製鉄東京のメモ書きがある。井田病院は1949年に市立病院として創立され、中原区井田2-27-1（平台）に所在する。八幡製鉄東京とは、1968（昭和43）年に八幡製鐵と八幡鋼管（株）が吸収合併され、1970（昭和45）年に新日本製鐵株式會社として発足した「新日鐵」が該当すると思われる。現在は所在しないものの、以前井田に新日本製鐵中央研究所第一技術研究所や新日鐵化学商品研究所などが中原及び鎌ヶ先方面にあったことからは、これらを指す記述とも考えられる。このことと現況の地形を勘案すると、模式図は天が南、地が北となっていることが推察され、蟹ヶ谷古墳（群）とされる3基の古墳は、平台の舌状に延びた台地上（市立井田病院の北側）に位置するものとみられる。

図には、「川崎市蟹ヶ谷古墳 №218」「№218 ①径10m位 高2.5m」「②径7.5m 高1.5m 土師小片 ハニワ円筒片」「③径8m 高2m」「井田病院」「八幡製鉄東京」「№219 茅a式土器 勝坂式 安行I式 打石斧」「新幹線」などのメモ書きがされている。

2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

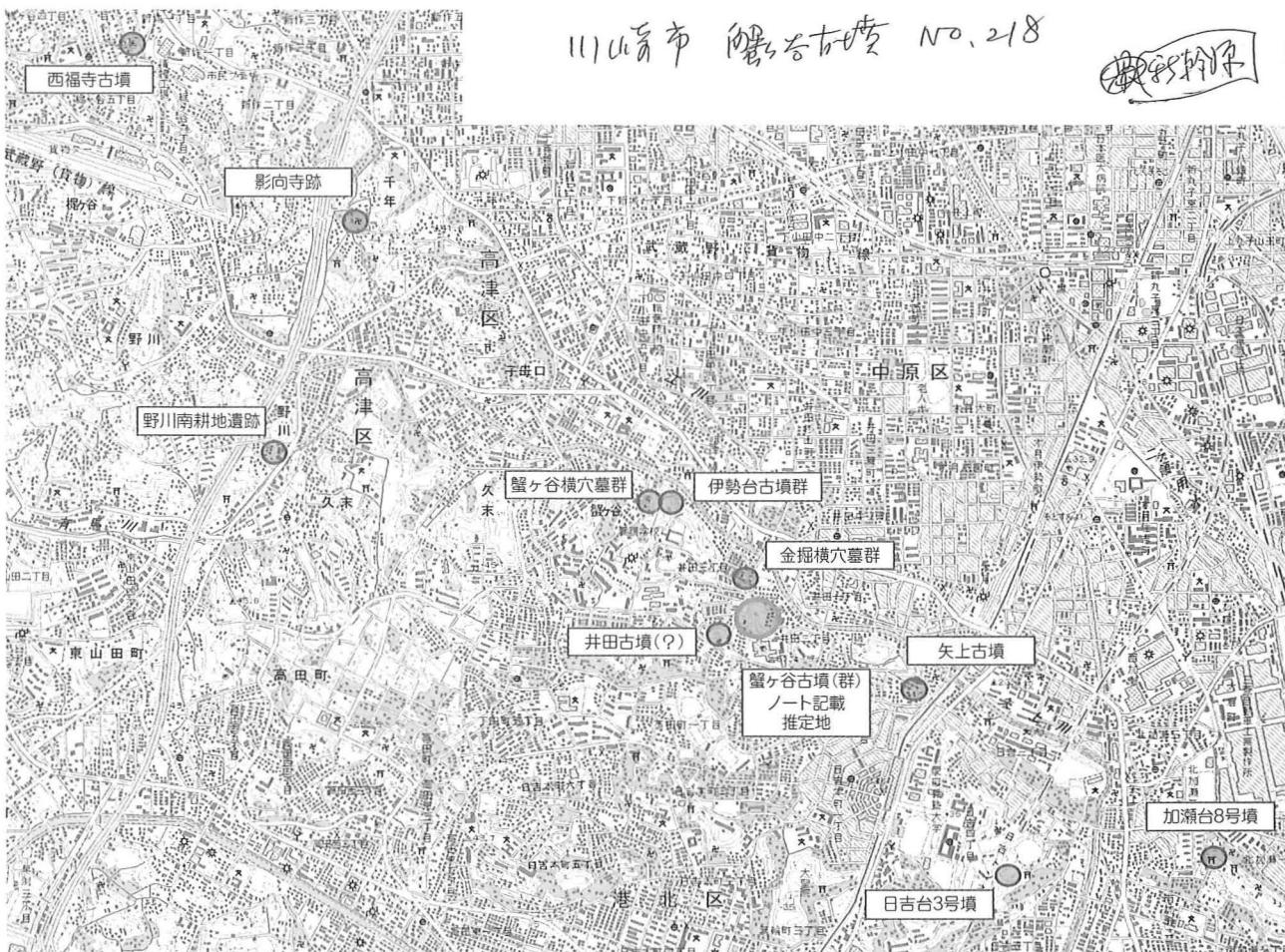
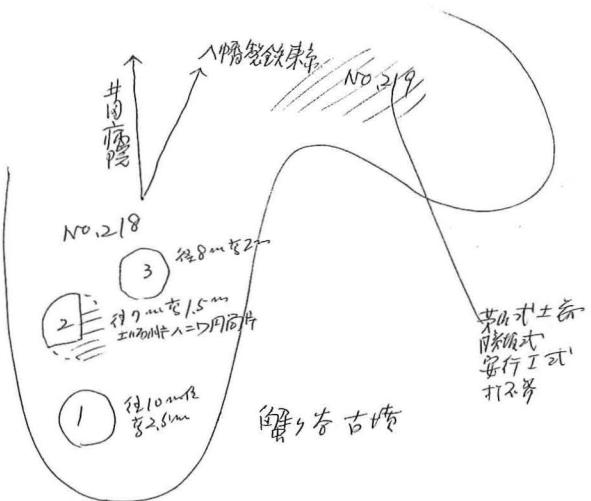
No 218とされる①～③は、古墳を表している事が考えられ、模式図からは②とされているものが、1/4程度の残存であることが伺える。記述からは、3基の古墳で規模は径10m程度、高さ2m前後が残存する円墳であろうことが伺え、②は半壊している事などから土師器の小片と、円筒埴輪片が採取されたものとみられる。No 219とされた場所からは、縄文土器や石器が採取されたようで、周囲の状況並びに出土遺物等を鑑みると、井田中原遺跡付近であることが考えられる。

②の古墳のように埴輪が出土している小型墳であることからは、古墳時代後半という時期を該当させる事ができそうである。しかしながら、蟹ヶ谷古墳（群）についての既刊行物による情報はなく、詳細は不明である。現地の状況は、舌状に延びる台地のほぼ南半は病院駐車場として整地され、北半は遊歩道となっているが、現況では塚状の高まりは確認できなかった。模式図の場所が正しいとすれば、北側の斜面地には、井田金堀横穴墓群等の存在が知られ、台地上の高塚墳と斜面地の横穴墓という位置関係となる。北西500m程度にある伊勢台でも、伊勢台古墳群と蟹ヶ谷横穴墓群が台地と斜面地という同様のあり方を示す。

伊勢台古墳群は2基が知られ、規模は12～13mの円墳とされるが、詳細は不明である。蟹ヶ谷横穴墓群は4基が調査されたが、他にも多くの横穴墓が存在していたようである。3号墓からは直刀（2）、刀子（1）、鉄鎌片、装身具類などが出土している。横穴墓群は7世紀代の時期があてられる。井田金堀横穴墓群は7基の横穴墓が知られ、第7号墓からは須恵器壺（1）、直刀（6）、鍔（1）、鉄鎌（多数）、鉄釘（2）など多くの遺物が出土している。TK43並行からの時期があてられる。他、川崎市文化財調査集録3（1967）には、西方に近在する井田古墳が、削平によりわずかに古墳の痕跡をとどめるとされている。また、埴輪が出土している周囲の古墳では、日吉台3号墳、矢上古墳、西福寺古墳などが挙げられる。

（柏木）

第4図 蟹ヶ谷古墳位置模式図



第5図 模式図が示す場所と 02023・02024・02036 の位置関係

02023・02024・02036 遺構・遺物概要の引用文献

- 1967・68 伊藤秀吉「川崎市の古墳(1)・(2)」『川崎市文化財調査集録』3・4 川崎市教育委員会
- 1982 高津図書館友の会郷土史研究部『川崎市高津区野川南耕地遺跡発掘調査報告書』
- 1986 蟹ヶ谷横穴墓群発掘調査団『蟹ヶ谷横穴墓群発掘調査報告書』
- 1988 川崎市『川崎市史』資料編 1
- 1989 佐藤善一・伊藤秀吉「川崎市内の高塚古墳について」『川崎市文化財調査集録』24 川崎市教育委員会
- 1996 浜田晋介「加瀬台古墳群の研究Ⅰ」『川崎市市民ミュージアム考古学叢書』2

年報番号 02036 川崎市（高津）区影向寺裏台地 川崎市宮前区野川影向寺裏台地

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所]

図には武藏野郷土館蔵とあり。（武藏野郷土館は、現在の江戸東京たてもの園：東京都小金井市）

[記載内容概略]

図が入っていた封筒は福井市役所のもので、神奈川県立博物館御中とのみ記され、料金後納郵便のため年月等の情報はない。高坏の図と1975年刊の『影向寺遺跡発掘調査概報』（久保常晴・大三輪龍彦）が入れられていた。図は方眼紙に描かれ、「口径15.5・高13.8・下9.0」cm（左右誤記があったようで、図左半の口縁部に修正すべき位置点が記される）、口縁部と脚部下間に「黒くすすぐついている」、脚部穿孔部分に「3ヶ所」「土師五領式 川崎市高津区影向寺裏台地出土 ムサシ野郷土館蔵」と記される。

器形は、坏部が中位にて明確な陵を持ち、屈曲後上方へ外反し、脚部は上半がやや外反気味に、下半が若干内湾気味に裾へ至る。裾は外方向に開かないともみられるが、図では裾部端面が破損しているかの印象も受ける。脚部中位には、直径8mm程度の円形となる穿孔が3ヶ所で認められる。口縁部と裾付近には、詳細不明ながら黒く煤が付着するようである。

方眼紙に描かれた図における各計測値は、口径が15.5cm、器高13.4cm、底径(9.2)cm、坏部の屈曲部分における径11.6cm、坏部と脚部の結合部径3.8cmを測る。残存割合や重量についての記述はない。

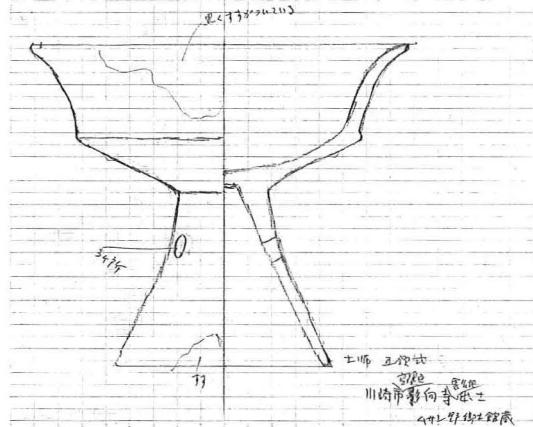
2. 記載資料の整理

[遺構・遺物概要]

体部上半が外反して広がるなど、器形からみたところ、その特徴からは古墳時代中期という時期が考えられる。川崎市高津区影向寺裏台地出土とのことであるため、現在の寺院敷地を含みながら、台地上に広い範囲を持つ影向寺関連の遺跡から出土していることが考えられる。影向寺境内とその周辺からは、古墳時代中期となる堅穴住居も数棟発見されており、それらに内包されていたものであることも鑑みられる。影向寺の旧十王堂跡地などの調査区では、古墳時代中期の堅穴住居は床や壁の大部分が削平されていたようであり、そのような堅穴住居の調査状況からもこのことは示唆されるものである。

近在は良好な資料に乏しいが、影向寺北遺跡（第2次調査）の資料や、やや南東に距離を持つものの加瀬台古墳群8号墳などの資料が併行する時期として挙げられよう。

（柏木）



年報番号02049 了源寺古墳出土 六乳一仙獸帶鏡 川崎市幸区北加瀬

1. 赤星ノートの内容

[資料保管場所] 東京国立博物館所蔵

[記載内容概略] 写真が入っていた封筒は都立神代植物公園植物愛好会のもので神奈川県立博物館御中と記されるが、料金別納郵便のため年月日等の情報はない。封筒の裏面には「了源寺古墳六獸鏡外一（東博）」「加瀬山四号墳」「明治43年古鏡二面直刀一発見」「久保常晴「川崎市加瀬山第三号墳発掘報告」（銅鐸第八号）昭二七」とメモ書きがされている。「外一」とは仿製の盤龍鏡と思われる。「加瀬山四号墳」とは現在の加瀬台4号墳に該当すると考えられる。了源寺境内に所在するため了源寺古墳と通称されている。中には鏡の白黒写真が2枚入っており、各写真の裏面には「了源寺古墳（東博）」と記されている。ここではこの内の1枚、六獸鏡について検討したい。破片は接合されているが一部を欠失している。表面の鋳化が著しく文様等は不鮮明である。内区外周に銘帯が巡っているが鋳化のため写真からは判読しがたい。鏡式は「六獸鏡」と記されているが、図像の一部が欠損しているため判断しがたいが銘文等と併せて仙人1、獸形5を配した仿製の六乳一仙獸帶鏡（一仙五獸鏡）と思われる。

2. 掲載資料の整理

[遺構・遺物概要] 鏡は面径12.0cm、縁厚0.6cmを測り、表裏に赤色顔料が付着し、鏡面に布痕が付着する。銘帯は右回りに「侯氏作竟真大巧有仙人不知老渴飲玉」の16字である（東博1986）。以下、写真から起こした計測値を記す。内区径は8.4cm、外区幅は1.8cm。鈕は円座を有し、鈕径は2.2cm、鈕座径3.9cmである。銘帯幅は0.5cm。乳は円座を有するが、各々規模が多少異なり、乳径は0.5~0.65cmを測る。構成は内区が鈕一突線一突線一主文様帶一銘帶一櫛齒文帶となり、外区は鋸齒文帶一突線一鋸齒文帶一平縁である。

まず、六乳一仙獸帶鏡とされる鏡は管見の及ぶ限り、国内においては本出土鏡以外に5面存在する。①京都府百々池古墳、②大阪府安威0号墳1号粘土櫛、③香川県古枝古墳粘土櫛、④香川県今岡古墳、⑤香川県石清尾山猫塚古墳から各1面出土している。以下に面径と銘文の内容等を記載する。

- ①完形13.6cm。「□氏□自有意青龍狂□（＝左？）□居□長宜子孫」（17字）
- ②完形12.3cm。「土方乍竟真大工青□（＝龍）」（9字）
- ③欠損14.5cm。銘文は不鮮明だが20字を越えない。
- ④完形13.2cm。「上方乍竟真大工青龍白虎宜子」（13字）縁は三角縁に近い斜縁。
- ⑤完形12.8cm。「吾作明竟大吉宜子孫」（9字）縁は三角縁に近い斜縁。

面径はいずれも12.0~14.5cmの範囲に収まる小形仿製鏡である。図像の配置は同向式で、文字数の差はあるが内区外周に銘帯を有する点が共通している。同一鏡式の中で本鏡と比較的類似する鏡としては図像の配置、仙人・獸形の表現などの点から④今岡古墳出土鏡が挙げられる。しかしながら、銘文の内容が全く異なるため同范・同型の鏡ではないと考えられる。また、これ以外に類似表現を持つ鏡は見られない。

仿製鏡に関する研究では、森下氏が外区文様の構成を時間軸として有効と捉え、外区文様の変化と内区文様の系列の変化を組み合わせて検討することで、編年を導き出す論考を書かれている（森下1991）。その分



写真5 六乳一仙獸帶鏡（約1/3）

類を参照すると、六乳一仙獸帶鏡とされる6面すべてが突線付鋸鋸文に該当する。ところが、森下氏の研究によれば、外区文様に突線付鋸鋸文を有する鏡には内区文様に獸形を配する系列がないため、外区文様の編年のみを採用することにしたい。時期は4C半ば～5C前半頃が中心とされているが、相模・南武藏地域の編年観からは4C末～5C前半頃が妥当と考えられる。

次に、銘文について検討してみる。「侯氏作竟…」で始まる鏡は管見の限り、国内での出土例はないが、中国で湖南省出土とされる後漢代の鏡（湖南省博物館1960）が1面出土している（三木1998）。面径は20.3cm、鈕座と内区外周に銘帯が巡る。銘文は「侯氏作竟大母傷、巧工刻之成文章、左龍右虎辟不陽祥、□子九孫居中央、夫妻相保□□□」（36字）。鈕座の銘文は「樂未央、宜貴昌、□侯王」（9字）である。しかしながら鏡式、銘文の内容、面径等いずれも了源寺鏡との類似点を見出せない。本鏡の銘文内容と類似する銘文を有する鏡は国内で70面程あるが、特に類似する銘文を持つ鏡としては2面挙げられる。^a福岡県井原鎧溝遺跡出土方格規矩鏡、^b岡山県用木1号墳第1主体部出土画像鏡である。以下に面径、銘文内容等を記載する。

^a 欠損13.2cm。「尚方作竟真大巧不知老渴飲玉泉」（14字）

^b 完形16.3cm。「尚方作竟真大巧上有仙人不知老渴飲玉泉飢食棗兮」（22字）

しかし、本鏡の銘文は「侯氏作竟真大巧有仙人不知老渴飲玉」（侯氏は竟を作り、真に巧い。仙人があり、老いを知らず、渴くと玉を飲む）（16字）であり、現在のところ、同一の銘文を持つ鏡はないようである。ところで、銘文は面径により必然的に文字数の制約が加わるため、小形の鏡では吉祥句全文を書くことはできず書き出しのみを引用することになる。そのため本文の内容を知らずに区切る、あるいは文字を省く例も多いと思われ、本鏡もこれに該当すると考えられる。常套句から察すると、本来の銘文は「上」、「泉」の2字を追加した「侯氏作竟真大巧上有仙人不知老渴飲玉泉」であるべきかと思われる。以上の鏡式及び銘文の検討から、本鏡には管見の及ぶ限りでは、同範・同型の鏡は存在しないことを確認した。

了源寺古墳は矢上川の東側、下末吉台地の東端に当たる細長い独立台地上に所在する加瀬台古墳群中の4号墳である。築造当時の墳形・規模は不明だが、墳丘は現存し、高さ3.5m、南北径21m、東西径27mの円墳とされる（佐藤・伊東1988）。内部主体は幅1.8m、深さ1.2mの石室であったとの報告もあるが、位置等は不明である。出土遺物は本鏡の他に盤龍鏡1、鉄斧2、刀1、剣1、土器、埴輪片がある（東博1986、本村1990）。鉄斧は1点が、現存長17.2cm、袋部径4.6×5.8cmを測る有袋鉄斧である。古瀬氏の分類によればB3類に該当し、時期は前期後半～後期、出現の上限は5C初頭頃とされる（古瀬1991）。刀とあるのは象嵌の施された頭椎大刀という報告（東文研1998）もあるが、本古墳に帰属する遺物か定かではない。同様に「埴輪や土器の出土があるが、現品を確認できずこれが4号墳に伴ったものであるかも不明であるので、年代推定の根拠になりえない」（浜田1991）との見解もある。以上を総合すると、鏡の外区の年代幅と鉄斧の上限などから了源寺古墳の年代は5C初頭頃と考えられる。

（林）

[掲載図書] 神奈川県県民部県史編集室1979『神奈川県史』資料編20考古資料

[掲載図書概略] 赤星氏撮影の了源寺鏡の写真が図版740に掲載される。鏡の解説は215頁に記載される。

遺構・遺物概要の引用文献（同論文中掲載は除く） 湖南省博物館1960『湖南出土銅鏡図録』文物出版社

東京国立博物館1986『東京国立博物館図版目録 古墳遺物篇（関東Ⅲ）』

国立歴史民俗博物館1986『共同研究 日本出土鏡データ集成』2『国立歴史民俗博物館研究報告』第56集

佐藤善一、伊東秀吉1988『川崎市内の高塚古墳について』『川崎市文化財調査集録』第24集 川崎市教育委員会

本村豪章1990『古墳時代の基礎研究稿』『東京国立博物館研究紀要』26号

森下章司1991『古墳時代仿製鏡の変遷とその性質』『史林』第74巻 第6号 京都大学文学部内史学研究会

東京国立文化財研究所1998『東京国立文化財研究所所蔵X線フィルム目録I－考古資料編－』

三木太郎1998『古鏡銘文集成』新人物往来社

年報番号02051 加瀬山3号墳 川崎市幸区北加瀬

1. 赤星ノートの内容

[調査（踏査）年月]

スケッチ等に年月日の記述は見当たらない。

[資料の概略]

資料A：「川崎 末期横穴資料（夢見ヶ崎） 越路古墳 加瀬山第3号墳」と題のあるスケッチ。

スケッチは表紙等も含め7枚あり、各スケッチには枝番号を付し、個々の内容について記述していく。

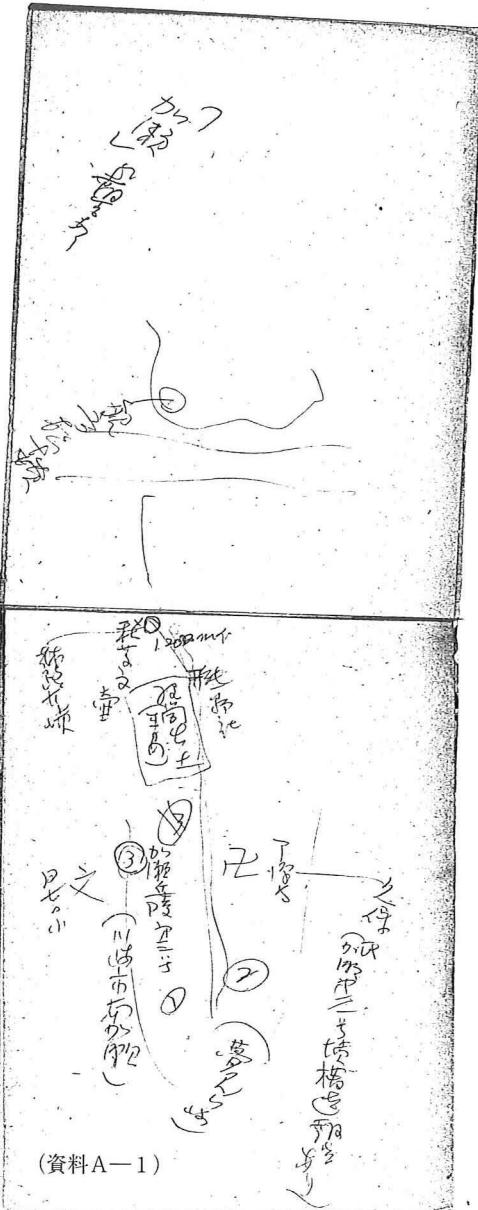
資料A-1（第8図）：見開き2ページにまたがり、観音松古墳や越路古墳、加瀬山第1号墳～第3号墳及び了源寺の位置的関係が描かれている。スケッチ上方には「[加瀬] 報告あり」との記述が見える。

「観音松古墳」とあるのは横浜市港北区に所在する前方後円墳である。「越路古墳」の位置を示したと思われる「○」印の左側には「秋草文壺」と書かれ、その右斜め下方には神社を示す記号と「熊野社」と書かれている。「○」印と神社記号との間には直線が引かれ、その直線上には「120m位」との記述が見られる。神社記号を挟むようにして「熊野社」の反対側には「経筒出土（平かめカ）」との記述がある。

スケッチの下半には学校記号と共に「日吉小」とあり、その右側には「③」、「加瀬丘陵第三号（川崎市南加瀬）」と記述されている。これが加瀬山第3号墳であり、（ ）内は同古墳の所在地を示す。これらの右側には、寺院記号と「了源寺」という記述とが並記される。「加瀬丘陵第三号（川崎市南加瀬）」との下方には「①」、寺院記号の下方には「②」という数字が書かれ、「③」が加瀬山第3号墳の位置を示すことから、これらはそれぞれ加瀬山第1号墳、第2号墳を表すと考えられよう。数字の下方には「（夢見ヶ崎）」と記されている。また、スケッチの最も右側には「久保氏（加瀬第三号墳…）報告あり」という記述が見られる。

資料A-2（第9図）：スケッチ上方には「加瀬丘9基在」「東芝で明治末一大正初に山を削って低地を埋めた」という記述がある。スケッチは丘陵裾から加瀬台第3号墳、了源寺に至るまでの立面模式図と思われ、「3号墳」という矢印の先には石室と考えられる描写が認められる。その右側に「若干」とあるのは墳丘が削られたことにより、石室天井部がわずかに露出している状況を示しているのだろうか。「10m位」というのは丘陵裾から石室付近までの高さと読み取れる。

資料A-3（第9図）：スケッチには「三号墳」と書かれ、加瀬台第3号墳石室の平面と石室正面から見た状



第8図 加瀬台3号墳付近のスケッチ

態のスケッチである。

資料A-4（第9図）：同じく「三号墳」とあり、こちらは石室入口から見た状態をスケッチしたと思われる。スケッチ下方には「礫敷」とあり、さらに「◎他にこの式のもの「越路古墳」ありき円墳なりしも今亡」という記述がある。これらの右側にはやや大きな字で「報告 立正大銅鏡第八号 久保氏報告あり」と書かれ、後に「久保常晴「川崎市加瀬山第3号墳発掘報告」と追記したようである。

資料B：「加瀬山第3号墳発掘報告」（久保常晴『銅鏡』第8号に掲載）のコピー1部。

この資料と共に、同じく『銅鏡』に掲載された「千葉県君津群大貫横穴調査（一）」（坂詰秀一『銅鏡』第12号）が一緒に綴じ込まれている。

資料C：「加瀬山第3号墳発掘報告」（久保常晴『銅鏡』第8号に掲載）の手書きの写し2部。

2部のうち1部は縦書きで、青ボールペンで書き写されたもの、残る1部は横書きの書式で、黒インクで書き写されたものである。前者は資料Bに忠実に書き写されたものと考えられるが、書き写したのは筆跡から赤星氏ではないと推測される。一方、後者は赤星氏が資料Bの要点を抜き出し、まとめたメモであろう。

資料D：「川崎市加瀬山第3号墳（久保常晴原図）」と書かれた同古墳石室の立面・平面図スケッチ1部。

原図となったのは、資料B中に掲載されている「第2図 加瀬第3号墳石室実測図」と考えられる。なお、このスケッチ中の筆跡等は赤星氏のものではないことから、写したのは赤星氏ではなさそうである。

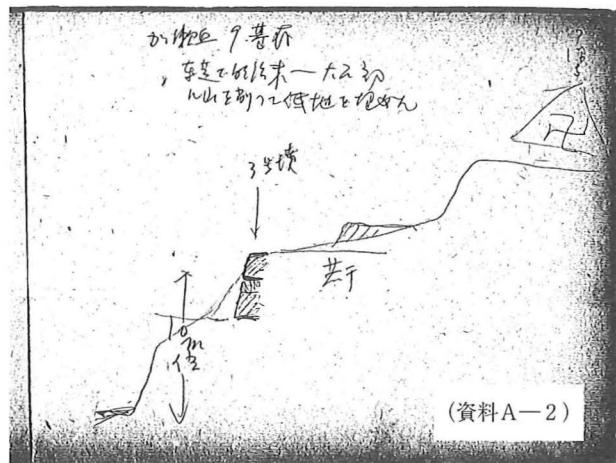
なお、資料B～Dについては、本稿内に図等の掲載はしていない。

2. 記載事項の整理

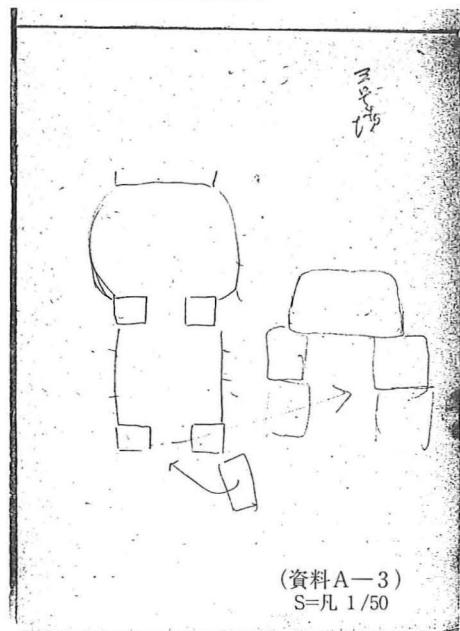
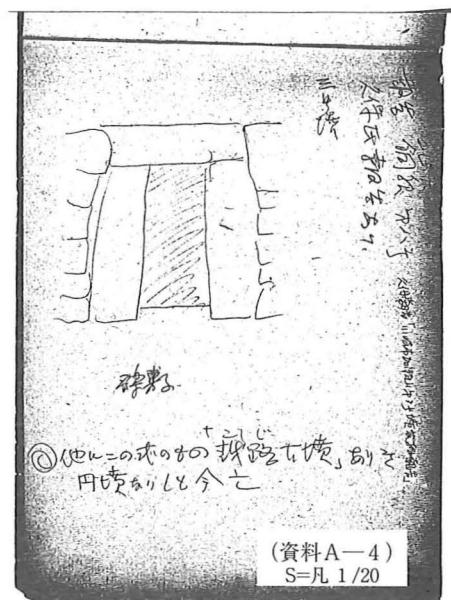
[加瀬台第3号墳の発掘調査成果]

以下、久保常晴氏による「川崎市加瀬山第三号墳発掘報告」をもとに調査成果の概要を述べていく。

加瀬山第3号墳は付近の農夫が発見した。その後、数人の農夫により石室の一部が発掘されたが、その最中に石室が崩



(資料A-2)

(資料A-3)
S=凡 1/50第9図 加瀬台3号墳の断面位置
と石室の状況

落した。そのため、作業が困難となり、副葬品が出土しなかったこともあり、作業は一時中断された。この経緯を受け、川崎市教育研究会と立正大学考古学会による発掘調査が計画され、昭和24年に石室保存を目的とした調査が実施されることとなった。

調査前の加瀬山第3号墳は「封土が崩れ落ち」、「築営当初の様相とは相当な開きを生じ一見して古墳とは容易に認め得ない状態」で、周溝や葺石、埴輪等の外部施設は認められなかったようである。古墳の主体部は切石による横穴式石室で南南西に開口する。玄室部分は「奥室」と「前室」とに分かれ、その間の石材が側壁よりもみ出した状態で置かれ、これにより2つの空間の仕切りとなっている。奥室の平面プランはいわゆる胴張りの形状を呈し、前室との境には側壁より内側にはみ出した状態で左右両側に柱状の切石が置かれている。奥室の両側壁及び奥壁石材は少しずつ持ち送るように積まれ、断面形は緩やかなドーム状を呈する。このような持ち送りは前室両側壁にも見られる。奥室床面には河原石が一面に敷き詰められていたとされている。前室の平面プランは長方形で、前室入口には奥室と前室との仕切りと同様に、柱状の切石が確認されている。また、その前面には、厚さ20cmの粘土の上に一辺約1m四方、厚さ35cm程の板岩が水平に置かれている。久保氏はこれを「羨門の蓋石と」し、粘土は蓋石を固定するために用いられたとしている。そして、これにより「本古墳には羨道はないものと推察された。」なお、石室石材には「此の付近にて得られる凝灰岩」が使用されたようである。

加瀬山第3号墳から発見された副葬品は少なかったようで、祝部土器小片、成人男子の人骨や歯、鉄釘、麻織断片と記録されている。同古墳の石室は「以前前室を薯甘の貯蔵のため一時利用」されていたことがあり、「古くから開口していたため副葬品は持ち去られた」と推定している。

この調査の結果、同古墳の被葬者について久保氏は「加瀬山南側はその前面に広大な沃野を擁して経済的に有利な位置にあ」ったとし、人骨や歯等から「壮年男子」と捉えている。同古墳の年代としては、切石積みの横穴式石室である点やその内部構造等から、「古墳末期の築営」とされている。また、奥室から発見された麻織断片については、被葬者が木棺に納められた際に用いられたという解釈が述べられている。

[「越路古墳」について]

資料A-1にある「越路古墳」について、管見に及ぶ限り文献は見当たらない。しかし、同資料に書かれた古墳や寺社等の位置関係から、「越路古墳」が加瀬台7号墳である可能性が考えられる。加瀬台7号墳の位置には現在、天照皇太神社の社殿が鎮座している。明治の地形図によれば、この辺りの字名として「越路」とあるのが確認できる。また、A-1には、「越路古墳」と「熊野社」との距離が「120m」と捉えられるような記述が認められる。実際の両者間は直線距離で約150mを測り、この数値と比較的近しいという点もこのように想定する根拠のひとつである。資料A-4にあるように、越路古墳が円墳である点も加瀬台7号墳と共に通する。しかしながら、「越路古墳」を加瀬台7号墳と想定した場合には矛盾する点がないわけではない。A-1の「秋草文壺」という記述がそのひとつで、この壺が出土したのはこの地点よりも北西方向に位置する白山古墳の後円部下側なのである。加えて、A-4の「今亡」は古墳が現存していないことを示すと考えられるが、加瀬台7号墳は加瀬台古墳群の中でも現存する古墳のひとつである。

[掲載図書]

加瀬台古墳群に関する文献は多くあるが、管見に及ぶ限りでは玄門の見取り図等の資料が掲載された文献は認められない。

(小 西)